ブラジリア大学のあるブラジリアは、一九六〇年に首都移転のために人工的に建設された都市で、美しくモダンなイメージで紹介されることも多い。しかし、官公庁の集まる中心地区を離れ、点在する衛星都市と呼ばれるベッドタウンをのぞくと、仕事を求めて全国から集まった貧しい人々が住みついたスラムのような地域も珍しくない。

私が参加した識字教室は、そのような貧しい衛星都市にあり、毎晩開かれていた。

留学当時（筆者は前列中央）レイス教授チームと識字教室に向かう途中で

多くの学習者の出身地は、ブラジルの最貧困地域の北部・北東部の州であった。彼らはみな、さまざまな理由で学校教育を受けなかった（または、途中でやめた）人たちだった。二〇代から六〇代まで年齢層も多様で、女性は家政婦が多く、男性は肉体労働者であった。顔のしわの深さや荒れた手が、これまでの楽ではない彼らの生活を表していた。私は、そんな彼らから、学ぶ意味や喜びを教えてもらった気がする。

初めて教室に訪れた学習者は誰もみな自信のなさそうな表情をし、「私、頭が悪いし、年をとっているから、できない」と否定的な様子だ。しかし、学習を続けていくなかで自信を取り戻し、彼らは変わっていく。まっすぐ前を向いて「学ぶのに遅すぎることは決してないとわかった。いまからでも遅くないから勉強を続けたい」と語る姿は、感動的なものだ。多弁ではない学習者の言葉一つひとつが重く、この識字教室で得た経験は、その後の私の研究の柱となった。

留学で学んだことを活かして

帰国後、周囲からは地域の日系人問題への関与を期待されることもあったが、しばらくの間、あまり積極的に日系人の問題とかかわることはなかった。「日系人＝ブラジル人＝不安定で生活が大変（かわいそう）／怖い／うるさい・迷惑」という社会に流通するステレオタイプな見方に嫌気がさしていたのかもしれない。

しかし、やがて時間がたち、私の考えも変わった。留学は家族、国際文化教育交流財団、大学はじめ多くの方々の支えにより実現したものであり、留学で学ばせてもらったことは、私個人のためだけではなく、社会に還元すべきではないか。研究者として、求められるのならばそうしたテーマと向き合う責任が私にはあるのではないか、と思うようになった。

そしていま、私は大学で主にポルトガル語を担当する傍ら、ブラジル青年・成人教育と外国人児童生徒教育の研究に取り組んでいる。留学の成果を活かすには申し分のない環境である。

ブラジル留学は本当に貴重でかけがえのない経験であった。だが私の留学の真価が問われるのは、これからである。支援してくれた方々に恥じることのないよう、今後も努力していきたい。

本奨学事業は、日本万国博覧会記念機構（http://www.expo70.or.jp）の助成金を得て実施している

ブラジル留学の真価はこれから

愛知教育大学講師
二井紀美子（にいきみこ）

国際文化教育交流財団二〇〇一年度奨学生。一九九七年名古屋大学教育学部教育学科卒業。九九年同大学大学院教育学研究科博士課程前期課程修了。〇一―〇三年伯国ブラジリア大学大学院修士課程留学。〇五年名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程後期課程単位取得満期退学。〇八年博士号（教育学）取得。日本学術振興会特別研究員PD、浜松学院大学講師を経て一〇年より現職。専門は教育学（社会教育・生涯教育）。

私は修士課程では公立中学校の外国人生徒支援にかかわりながら、現状分析をした。私の住んでいた愛知県を中心に、一九九〇年代から日系ブラジル人が急増し、彼らをどのように受け入れていくのかが地域や学校で問題になっていたからだ。しかし、博士課程進学後は、研究の方向性に限界を感じていた。

私が留学を真剣に考えるようになったのは、ちょうどそのころのことだった。「日本の中学校を中退しても、ブラジルに帰って向こうでもう一度中学校の勉強をすれば全く問題ない」と言って卒業まで半年を残して退学し就労したブラジル人少年の話を聞いて、私はブラジルの、特に学齢期を過ぎた大人のための教育（青年・成人教育）に興味を持った。

しかし、日本で手に入る資料はほんのわずかしかなく、留学しなければ研究の進展はないと思った。心配する両親を「留学しなければ先はないの」と説得し、留学の機会を探した。学内で国際文化教育交流財団の奨学生募集ポスターを見つけた時、最初は高嶺の花のように思ったが、だめで元々の気持ちで応募した。

その後の、面接通知が来た時と奨学生採用通知が来た時の跳び上がるほどのうれしさはいまでも鮮明に覚えている。留学の機会を与えてくれた国際文化教育交流財団に心よりお礼を申しあげたい。

学ぶのに遅すぎるということは決してない

そうして夢をかなえて二〇〇一年から二年間、ブラジリア大学大学院に留学した。

大学院では青年・成人教育を専攻した。授業は、指定文献について自分の意見を次々に述べていくディベート型が基本だった。「私も言いたい」と次々に手を挙げ司会に発言許可を請う同級生を横目に、私は聞き取るのに必死だった。授業の話についていくために、授業を録音し、自宅で何度も聞き直しながら毎日辞書とにらめっこしたものだ。いま思えばそれも懐かしい。

授業も想い出深いが、それよりも最も多くのことを学ばせてもらったのは、読み書きできない成人のための識字教室からだった。私はその教室活動に、留学中の二年間、指導教官のレイス教授のチームとともに参加した。

●国際文化教育交流財団は、経団連第二代会長故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。これまでに、世界三一カ国の大学・大学院へ一七九名の日本人留学生を派遣するとともに、世界三七カ国五一六名の外国人留学生への奨学金の供与や講演会等を実施してきている。